

フリーアと日本美術

昨年10月号に「デトロイトの秘宝『フリーアハウス』」と題した拙稿を掲載させていただきました。今回は、フリーアハウスの重要性、フリーアとフェノロサ、そしてフリーアの日本美術コレクションに焦点を当ててみたいと思います。折しも、来る10月24日、デトロイト美術館（DIA）にてフリーアと日本美術に関する講演会が予定されています。この講演会の後にはフリーア邸において日本語のハウスツアーも計画されており、またとない機会ですので、歴史や美術に関心のある読者の方々のご参加をお薦めします。詳細は「定期講演会のご案内」をご参照下さい。

フリーアとデトロイト

前回の記事を読まれなかった方々のために、チャールズ・ラング・フリーア（Charles Lang Freer, 1854-1919）についての簡単な説明をもう一度。ニューヨーク州出身のフリーアは1880年にデトロイトに移り住み、貨物列車の車両を作る会社を創設。1899年、自社と他の13の車両メーカーとの合併を成功させ、アメリカン・カー・アンド・ファウンドリーという巨大な鉄道車両会社を作り上げたが、その直後40代半ばで引退。残りの人生を美術蒐集に捧げた。数回にわたって（1895年、1907年、1909年、1910年、1911年）来日した

日本通であった。彼のコレクションはホイットラー（James Abbott McNeill Whistler）に代表されるアメリカ美術のほか、東洋美術、中近東美術を含み、特に東洋美術部門ではボストン美術館と並ぶ世界屈指のコレクションといわれている。生前から自分のコレクションを祖国アメリカに寄贈することに決めていたフリーアは、私財を投じて自分の理想にかなう美術館を首都ワシントンに設立することにした。惜しくもその落成を見ることなく1919年に65歳の生涯を終えたが、彼の名前を冠したフリーア美術館はワシントンのスミソニアン博物館群の一つとして1923年に完成した。（なお、現在の正式な名称はFreer Gallery of Art / Arthur M. Sackler Gallery。1987年に開館したアーサー・M. サックラー美術館とフリーア美術館は地下で連結しており、両美術館はディレクター並び職員を共有している。）

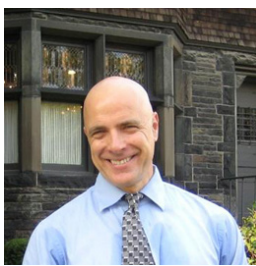
デトロイトのフリーアハウス

フリーアの旧宅（通称フリーアハウス）はデトロイト美術館(DIA)のすぐそばに現存しているが、今はWayne State Universityに属するメリル・パーマー・スキルマン研究所のオフィスとして使われている。私がボランティアをさせていただいている「フリーアハウス友の会」はフリーアハウスの保存・修復とフリーアの業績を世間に伝え広めることを目的とした市民団体であるが、その友の会の役員、ウィリアム・コルバーン氏はフリーアハウスの重要性についてこう語る。「日本文化や芸術と関係のある歴史的建物といえば、ミシガン州ではデトロイトのフリーアハウスが一番でしょう。アメリカ国内をさがしてもあまり類を見ません。日本やその他の東洋美術品の第一級の蒐集家であったチャールズ・ラング・フリーアは先見の明のある人物でしたが、彼の旧宅フリーアハウスは彼の物語を私たちに語りかけてくれます。彼のコレクションは首都ワシントンのフリーア美術館に遺贈されてしまっていて今はもうフリーアハウス内には残っていませんが、訪れる人々にかつてここに収蔵されていた稀有の美術品のこと思い起こさせてくれます。」

アメリカでは、歴史上価値のある場所を認定、登録して国家が援助する法案(National Historic Preservation Act)が1966年に通過したが、コルバーン氏によれば、フリー



フリーアと2人の人力車夫
京都、1895年（明治28年）
ワシントンD.C.フリーア美術館蔵



ウィリアム・コルバーン氏
フリーアハウスの前で

アハウスはそのNational Register of Historic Placesに登録されているという。今年で築約120年。室内の壁はその後幾度か塗り替えられ、また、大学のオフィスとして機能するために改造された部分もあり、当時の洗練された面影はない。しかし、なぜか日本人の心にしみる空間がそこにある。外見は地味だが、家の中に入ってみると、なかなか凝った設計であることがわかる。決して華美に走ることなく、さりげなく奥ゆかしい。一言で言えば、家全体に凛とした気品が漂っている。それは、東洋美術を愛したフリーアの美意識の表れであろう。

フリーアとフェノロサ

日本人でアーネスト・フェノロサ(Ernest Fenolosa, 1853-1908)の名前を知らない人はおそらくいないだろう。私の手元にある中学校の歴史の教科書には、美術の近代化という見出しでこう記されている。「文明開化のうたわれたころは、古いものはもうないと言われてきたが、日本にきたアメリカ人フェノロサによって、日本の古美術のすばらしさが認められた。岡倉天心は、フェノロサと協力して日本の美術の復興に努め、日本画壇には、橋本雅邦・横山大観・菱田春草のすぐれた画家が現れた。」（引用は原文のまま）

しかし、そのフェノロサからフリーアがかなりの日本美術品を入手していたことはあまり知られていない。保坂清著の「フェノロサ：『日本美術の恩人』の影の部分」によると、フェノロサは1901年（明治34年）アメリカ中西部諸都市で講演し、同年2月23日から3月1日まで、デトロイトのフリーアの私宅に滞在し、二人の親交が始まった。同年、フリーアはフェノロサから北斎屏風、肉筆浮世絵などの日本美術コレクションを約1万ドルで、さらに、翌年の1902年、大徳寺旧蔵羅漢図や狩野芳崖筆観音図など8点を5千ドルで購入した。1906年は、スミソニアン協会がフリーアからの美術コレクション寄贈の申し入れを受諾した年であるが、コレクションの整理の手伝いをフリーアから依頼されたのもフェノロサであった。

フリーア美術館蔵の重要文化財・国宝級の日本美術品



フリーア美術館蔵の俵屋宗達の「松島図屏風」（上写真）は、日本から海外に流出した美術品のなかでも最高作品の一つにかぞえられ、日本に残っていれば国宝間違いなしとも言われている。他に、尾形光琳の「群鶴図屏風」、葛飾北斎肉筆の「雷神」や「富士と笛吹童子」（右写真）もフリーア美術館が所蔵。



狩野芳崖(1828-1888)は近代日本画の基礎を築いたといわれる明治の代表的画家であるが、彼の絶筆となった「悲母観音」（右写真の左）と題する作品が東京藝術大学に収蔵されている。重要文化財に指定されているこの「悲母観音」は、フリーア美術館の「観音」（右写真の右）と酷似している。芳崖が明治17年（1884年）の第2回パ



2008年開催された美術展のポスター
写真提供：東京藝術大学美術館



他3点はフリーア美術館

リ日本美術縦覧会に出品した作品がフリーア美術館蔵の「観音」で、これはフランスで個人所有になっていたものをフェノロサが買い戻して、1902年にフリーアに売ったものである。妻に死なれて打ちひしがれていた芳崖が、自作の「観音」をフェノロサから見せられ、亡き妻を思いながらも一度描いたといわれているのが東京藝大所蔵の「悲母観音」。これらの作品のほか、フリーア美術館には1万1千点以上もの日本美術品が収められている。

フリーアと日本美術に関する講演

フリーアハウス友の会は、定期的にその分野の専門家を招いて講演会を行っているが、今回の講演は10月24日（日曜日）に予定されている。講師はカリフォルニア州出身の日系米人、アン・ヨネムラ氏。英語での講演のテーマは「日本美術の鑑識眼ーチャールズ・ラング・フリーア・コレクションの形成」。ヨネムラ氏は1976年からフリーア美術館で日本美術専門の学芸員として活躍されている。日本美術の海外での高い評価は、フリーアの鑑識眼にかなった質の高いコレクションに負うところが大きい。しかし、彼が一般にあまり知られていないのは残念である。チャールズ・ラング・フリーアとはいったいどんな人物であったのだろうか。そして、彼の日本美術コレクションはどのように形成されていったのであろうか。ヨネムラ氏の講演が楽しみである。



アン・ヨネムラ氏
写真フリーア美術館提供

参考文献

- ・木村尚三郎他「中学生の社会科：日本の歩みと世界（歴史）」中教出版株式会社 1978年
- ・保坂清「フェノロサ：『日本美術の恩人』の影の部分」河出書房新社1989年
- ・日本の恩人フェノロサ <http://kajipon.sakura.ne.jp/kt/haka-topic36.html>
- ・狩野芳崖 悲母観音への軌跡 <http://www.juqcho.com/appreciating/reviews/2008/20080906.html>
- ・Thomas Lawton & Linda Merrill, Freer: A Legacy of Art, Freer Gallery of Art, Smithsonian Institution, 1993

筆者の略歴 弘子 Lancour

- ・福岡市生まれ。国際基督教大学教養学部語学科卒業後渡米。Wayne State University
- ・コンピューターサイエンス科卒業後、Blue Cross Blue Shield of Michigan 勤務。
- ・現在、Wayne State University大学院修士課程在籍中。絵画専攻。フリーアハウス
- ・友の会ボランティア。E-mail: hirokolancour@yahoo.com

フリーアハウス定期講演会のご案内

題： A Discerning Taste for Japanese Art
- the Formation of Charles Lange Freer's Collection
「日本美術の鑑識眼ーチャールズ・ラング・フリーア・コレクションの形成」

講演者：アン・ヨネムラ（フリーア美術館上級准学芸員 Ann Yonemura）

期 日：2010年10月24日（日曜日）

場 所：デトロイト美術館内レクチャーホール
(5200 Woodward Avenue, Detroit, MI 48202)

時 間：午後3:00

聴講料：聴講料は無料だが、美術館入場料が要る（大人 \$ 8、子供 \$ 4）

予 約：必要なし

講演後、フリーアハウスにてレセプションとガイド付ハウスツアー

場 所：フリーアハウス(71 East Ferry, Detroit, MI 48202)
デトロイト美術館から1ブロック北へ徒歩約2,3分

時 間：午後4:30

見学料：大人 \$ 10、学生 \$ 5（フリーアハウス友の会メンバーは無料）

予 約：ハウスツアー参加ご希望の方はローズ・フォスター (Rose Foster) さんへご予約をどうぞ。

電 話 → 313-872-1790 または Email → rmfoster@wayne.edu

主 催：フリーアハウス友の会

<http://www.mpsi.wayne.edu/about/friends-freer.php>

日米協会 <http://us-japan-canada.org/en/home/>

デトロイト美術館 Asian Islamic Art Forum

<http://www.dia.org/auxiliaries/11/AIAF.aspx>